

<古文書の部>

(重要文化財を国宝に)

えっちゅうのくにいみずぐん なるとむら こんでんず まふ  
越中国射水郡鳴戸村墾田図(麻布)  
てんひょうほうじ  
天平宝字三年十一月十四日

一鋪

【大きさ】縦79.8cm 横140.5cm

【所有者】独立行政法人国立文化財機構(奈良国立博物館保管)

本図は、奈良時代の条里制下における越中国射水郡鳴戸村(現富山県高岡市)に存在した東大寺領庄園における土地開発状況を詳細に記した絵図で、天平宝字3年(759)の作成になる。文字のある箇所には「越中国<sup>えっちゅうこく</sup>印」が捺されている。

本図は、麻布を用いた数少ないもので、額田寺伽藍並条里<sup>がくでんじがらんならびにじょうりず</sup>図(国宝)や正倉院宝物の絵図に比べても保存状態が良く、作成当初の状態を今に伝える稀有な遺品であり、学術的価値が極めて高いものである。

(奈良時代)

## <彫刻の部>

(未指定文化財を重要文化財に)

どうぞうによらいりゅうぞう  
銅造如来立像

一 軀

【大きさ】像高18.1cm

【所有者】宗教法人光明寺（五條市西吉野町西新子436）

西吉野の山深い寺院に伝えられた新羅統一時代（8世紀）の金銅仏である。鍍金の輝きが見事で、抑揚がありかつ的確な体軀たいいくの構成、力強く自然な衣文のさばきなど、造形もきわめて優れている。背面に中型を固定するハバキなかがこを設けることや、右袖を別製し取付ける（亡失）点かえりばなに新羅仏の技法上の特徴がうかがえる。古代日本への外国文化の流入を具体的に物語る作例として注目される。反花さんべんけいの各弁の先端が強く立上がり三弁形を呈する、華麗な意匠の台座を伴うのも貴重である。

（新羅統一時代）

## <古文書の部>

(未指定文化財を重要文化財に)

へいじょうきゅうせきないぜんし すいていちしゅつどもつかん  
平城宮跡内膳司推定地出土木簡

四百八十三点

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（奈良文化財研究所保管）

本木簡は「地下の正倉院」といわれる平城宮跡の内膳司推定地から出土した木簡のまとまりで、年紀の判明するものは、神亀五年（728）～天平元年（729）と天平末から天平勝宝にかけてのものである。贄にえの貢進物の荷札にふだや鶺鴒の文書木簡など内膳司と推定する手がかりとなる木簡、また平城宮の造営に関わる荷札など内容に特徴がある。正史せいしが伝えない奈良時代の社会・経済を詳細に知りえる史料群であり、その記録性や学術的価値が高い。

（奈良時代）